

夏まき冬どりキャベツの育苗期間を延長した苗による安定生産

研究のねらい

本県の平坦地では、業務用を中心とする冬どりキャベツが栽培されています。しかし、近年は、夏季の猛暑により定植した苗が枯死することがあり、生産が不安定となっています。この対策として、育苗期間の延長による苗のハードニング（硬化）処理が有効と考え、効果を検討しました。



写真 キャベツの慣行苗と硬化処理苗

技術の特徴

- 1 播種日を通常より早め、育苗期間を15日長くして45日育苗した硬化処理苗は、30日育苗した慣行苗に比べると、子葉は脱落するものの、茎葉が硬くしまつた苗になります（写真）。
- 2 200穴セルトレイを用いた硬化処理苗は、軸長が伸びて、球転び率が高くなりますが、128穴セルトレイを用いた硬化処理苗は、軸長の伸びが抑えられ、球転び率もあまり増加しません。また、収量も高い傾向が認められ、本作型に適します（図、表）。
- 3 猛暑が続く時は、朝または夕方など、温度が低い時間帯に定植し、灌水設備があるほ場では、灌水を行い活着を促します。

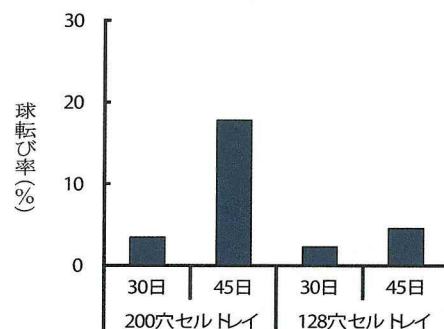


図 キャベツ苗の球転び率

今後の取り組み

今後は、他の作物についても夏期の高温対策技術について取り組む予定です。

（執筆者：小倉 愉利子）

表 育苗トレイの種類と育苗日数の違いがキャベツの生育に及ぼす影響

試験区	育苗日数	結球重 (g)	同左変動係数 (%)	収量 (kg/10a)	軸長 (mm)
200穴セルトレイ	30日	1,106	20.0	5,265	8.8
	45日	1,266	21.0	6,033	10.3
128穴セルトレイ	30日	1,233	16.0	5,870	8.8
	45日	1,300	19.1	6,189	8.8

注) 播種：平成25年7月3日（45日育苗）、7月18日（30日育苗）
定植：8月20日、栽植様式：畝間60cm、株間35cm
調査株数：12株×3反復、軸長：地際から切り口までの長さ